

《イスラーム諸国事情》

女性ロックバンドで揺れるサウジアラビア

イスラーム研究家 齊藤力二郎

はじめに

イスラーム法を最も厳格に適用する保守王国のサウジアラビアで、4人の女性が騒ぎを起こしている。同国西部の商業都市、ジェッダの女子大生たちが、「勲章」と名付けたロックバンドを結成し、11月11日に初めての英語のアルバム「ピノキオ」をネットサイトの「マイ・スペース」で発表したのだ。数年前にジェッダには男性のみでアラビア語で洋楽を流すロックバンドは幾つか誕生したが、女性のロックバンド結成は前代未聞の珍事。

この「事件」を最初に報じたのは特ダネを得意とする米紙、ニューヨーク・タイムズ。強い関心を示した同紙の単独インタビューに、バンドメンバーたちは偽名で応じた。以下はその記事の抜粋である。

事件の報道記事

ジェッダのキング・アブドゥルアジーズ大学で芸術を専攻するギター奏者のディーナーは語る。「音楽の中でも特にロックに関心があったので、歌のチーム作りを夢見て、ギターを習い始めたの。そこで同じ夢を抱いていたダーリーンや、その後ボーカリストになったリムヤーと知り合ったので、真剣に「勲章」結成を考え始めたわ。確かに私たちのしていることは普通ではなく、男の子の中には、奇妙だと考える人も居るけど、国外で暮らし西欧式の生活を味わった多くの人は、このような歌に関心を示しているわ」

ボーカリストのリムヤーは語る。「大眾を前にしたライブでアルバムを録音したのではなく、自宅で質素な楽器で録音したものなのに、何万人もの男の子たちがネットからダウンロードしたので『ピノキオ』が世に出たの。女子大生の私たちは少なくとも女性社会の中だけでも演奏したいので、特に女性社会で徐々に動こうと決めたの。家族は応援している。ドバイで演奏会を開いたら良いわね」

続いて特集を組んだ英紙、テレグラフは、読者が曲を聴けるようにした。同バンドが写真無しで曲を公表したウェブ・サイト「マイ・スペース」から18日間に7万3千回以上も「ピノキオ」がダウンロードされた。現在は電子マネーにより有料化されたが、ユーチューブなどの幾つもの無料サイトが直ちに現れた。また、同バンドは「フェイス・ブック」上にファンクラブを設けた。

宗教界は反発と沈黙・リベラル派は同調

カタールのイスラーム・オンライン・ネット紙のインタビューにマッカ公開大学の学長アリー・アムリー師は、「イジュマー（法学者の総意）により、成人した女性が男性の前で歌うことはハラーム（禁忌）である」とし、以下の聖クルアーンを引用して「若者たちは神に回帰せよ」と断じる。

『預言者の妻たちよ、あなたがたは（外の）女たちと同じではない。もしあなたがたがアッラーを畏れるならば、心に病ある者の意を動かさせないよう、言葉が軽くてはならない。端正な言葉でものを言え』（部族連合章第32節）

文化評論家のムハンマド・ミンカリー氏は、現在サウジの成年男子に伸張するロックバンドや西欧の新風潮を芸術の墮落と切り捨て、『勲章』と呼ばれるバンドは、ちゃちで、一過性で、安直を賛美する時代の産物だ」とこき下ろした。

一方、同国の評論家、ハリーマ・ムズフィル女史は、「文化のグローバル化が進行する現在、女性のバンドが現れることは予想できた。反対するだけではなく、若者たちが求めるものも与えてあげなければ。思春期を過ぎれば無くなること」と理解を示す。

最近の『宗教警察』事情

バンドのメンバーたちが最も恐れるのは王国の社会風紀を支えているものの一つである「勲善懲悪機構」と呼ばれる宗教警察だが、国内の他都市より遥かに解放され自由度が高い港湾・商業都市ジェッダの宗教警察は、今回取締りにそれ程厳格ではないようで沈黙を守っている。故

ファイサル国王の息子で、『思想と詩歌の王族』と呼ばれる程の文化愛好家である、ジェッダを含むマッカ州のハーリド・ファイサル知事が、9月に「宗教警察官は（身内以外の男女の逢瀬を摘発するために）、私の許可無くしてレストランの（男女が同席できる）家族席への立ち入りを禁止する」という命令を出した後、ここの警察の権力は低下気味のようなうだ。同知事は前職であるアシール州知事時代から、宗教警察から批判の対象にされてきた。

ところが最近、ジェッダ市民を仰天させる前代未聞の「事件」が起きた。ジェッダの宗教警察長官が部下二人を引き連れて、流行中のボーリング場に乗り込んだ時、誰もが場内で何か変事が起きたと思ったのだが、何とこの3人の顔つきはにこやかで、そこにいた若者のグループと勝負し、しかも勝利したのだ。

しかし、一方では相変わらず「イスラームでは女性の声は恥部（と同一）であるから、（身内以外の）男性が聴いてはならない」とか「女性のイスラーム教徒は、（男性を）惑わせたり本能を刺激させないよう、嬌声やうっとりさせる声を出さないようすべき」、「メンバーたちは貧困国から来て国籍を取得した屑だから、国籍を剥奪して帰国してもらいたい」とする声もある。

このように、最近サウジアラビア社会には、「女性に完全なる権利」を与えようとする「リベラル派」と、イスラーム法に反するとして反対する「保守派」との論争が巻き起こっている。

事件を報じたサウジアラビアが所有するアルアラビヤ紙には512もの読者投稿が寄せられていることから、この報道に対するアラブ人の強い関心度が窺える。反響の多くは好意的なものだが、罵倒する男女の声も相当ある。それらの中から幾つかの代表的な意見を抜き出してみる。

『賛成派』

- ・社会には多様性があるべきだ。
- ・素晴らしいバンドだ。敬虔さを装う偽善者よりもましではないのか？
- ・何か言われたら何でも「あれは生粋のサウジ人ではなく、巡礼客の不法残留者だ」と反論するのがサウジ人の口癖だ。【注：巡礼地マッカに近いジェッダには不法残留巡礼客が多い】
- ・結構なのは、この保守的な社会でバンドを結成した女性たちの勇気だ。滑稽なのは、この滑稽なニュースに誰もが関心を示したことだ。
- ・サウジアラビアの女性芸術家は、国外に芸術亡命するべきだ。

『反対派』

- ・我々アラブ・イスラーム社会が直面している西欧化攻勢がもたらした結果だ。
- ・預言者さま。我々はパレスチナを失い、その後イラクを失い、更に青年男女まで失いつつあります。一体誰が我々の尊厳を回復してくれるのですか。（自称、誇り高きサウジ女性）
- ・芸術には反対でないが、その輸入には反対だ。我々は西欧を模倣するが、彼らが我々の文化を模倣しようとしたことがあるか。逆に我々を獣のように描く。サウジの女性が（外国行き）飛行機に足を踏み入れた途端にベールを脱ぎ捨て「私たちのお金で何でも好き放題にするわ」と言うのではなく、思想の創造性の点で日本やドイツ女性を模倣してもらいたい。
- ・彼女たちよりも、このような墮落を許した彼女たちの家族が恥を負うべきだ。